

## ともに生あるうちに

ここにあらためてユートピア野球部・土井道治監督へ、これまでのご温情に心からの謝辞をお伝え申し上げます。

土井さん。本当に残念なことに、今年の十二月八日、私は中華人民共和国・山東省青島（チンタオ）に滞在していて、恒例の年一度の特別な昼食をあなたとご一緒出来ないでいます。

昭和十六年（一九四一年）十二月八日、空母「赤城」を旗艦とする日本海軍機動部隊が、アメリカ合衆国ハワイの真珠湾（パールハーバー）内に停泊中の米國太平洋艦隊を奇襲攻撃した、まさにその当日、土井道治さんは広島県安芸郡坂町に誕生しました。

真珠湾攻撃の華々しい戦果に沸く広島で土井さんが産声をあげた頃、九州沿岸から西へわずか千キロの距離にある青島では、杉山六蔵中将指揮下の第三支那派遣艦隊が黄海を睨（にら）んで、最高レベルの警戒態勢をとっていたのです。

一九一四年（大正三年）の第一次世界大戦勃発時、ドイツ占領下にあつてドイツ東洋艦隊の本拠地であつた青島を、日本は当時の日英同盟に従つて多大な流血を代償に奪い取りました。その後も続く日本による青島領有は太平洋戦争勃発の遠因にもなりました。

日本軍による真珠湾攻撃のこの十二月八日、たまたま私が中国・青島に居合わせたことを奇縁なことに思い、私は電話で誕生日のお祝いを土井さんに伝えました。

土井さんと私、ともに歴史好きの私たち二人は、毎年十二月八日のその日、

「リメンバー、パールハーバー！（真珠湾奇襲を忘れるな）」

と笑い合つて、土井さんの誕生日を祝つとともに、平素の無音（ぶいん）を埋める昼間の小宴を共にする習慣がここ何年も続いています。

太平洋戦争の火蓋（ひぶた）が切られた、まさにその当日生まれた土井さん。日本が敗れたのち、開戦時の内閣総理大臣兼陸軍大臣として戦勝諸国からA級戦犯とされた東條英機大将が、開戦から七年の後、東京・巣鴨

拘留所で絞首刑を執行された、その十二月に生まれた私。

私たちは太平洋戦争の勃発、そして日本敗戦、という日本史上特筆すべき大転換期のさなかに生まれたのです。

広島への原爆投下の日を、当時まだ四歳に満たない土井さんは鮮明に憶えているのだそうです。

「前の日にどこかの結婚式があつてのお。食糧難でめつたに食べれんぞのご馳走の残りを、お袋と二人で朝飯がわりに食べようとしたり、まさにその時じゃ。西の方角でとてつもない閃光と爆発音が『ボガンッ！』じゃ。塀は倒れる、窓ガラスは吹き飛ぶ。あとはもうメチャクチャよお。それが八月六日の朝のことじゃった。とてもご馳走どころじゃない。わしゃあ、それ以来、出された料理は好きなもんから真っ先に箸をつける習慣がついてしもうた。食べ物の恨みはこわいもんでえ。わあはっはっはっはっ」

被爆直後の惨事を語ることはなく、からつとしたユーモアを交えながら土井さんは話します。エスプリを効かせて悲劇を喜劇のように、喜劇を悲劇に変えてしまういつもの土井さん独特の話術です。

土井さんとの小宴はイタリアンの店であつたり、馴染みの寿司屋の片隅であつたり、三時間を過ぎても二人きりのとりとめのない談義は尽きることはありません。仲間の近況確認に始まって、二人の夢想家の談義はその時々国際情勢や国内政治、近頃読んだ本の感想、作家論、日本史や世界史の二人の私論、果ては人類の文明論へととめどなく拡がります。それにちよつとエッチな話題も織り交ぜて。まるで地球をバレーボールほどのサイズに縮めて手に乗せ、眺めつつ古今東西を語り合う哲学者のように。

\*

昭和四十年代後半（一九七〇年代）頃のこと。私の同級生が中心になって、職業も年齢もバラバラの草野球チーム「ユートピア」が結成されました。

最年少の中原泰三君は高校生（センター）、最年長は三七歳の食品会社社長、楠原眞之介さん（ライト）。部員の数だけは二十人近くいるものの、約束の日曜日にグラウンドに来てみると、頼りとするピッチャーもキャッチャーも来ていないことがしばしばでした。

明治維新の翌年の創業、日本最古の株式会社といわれる日本の代表的な書籍販売会社・丸善の広島支店野球部がユートピアと実力伯仲するライバルチームでした。というよりも、ユートピアは歴然と力量の勝る相手とは対戦しないという、実に腑甲斐（ふがい）ないチームだったので。

野球シーズンは早春に始まり、陽をさえぎる木陰もない炎暑の夏、冷たい雨の降る晩秋まで、グラウンドでの対戦が何度も繰り返されました。丸善チームのなかで小柄な体でひとときわ敏捷に動き回り、ベンチからバットを片手に、横柄な態度で我々に野次をとばす監督兼内野手がいました。土井道治さんでした。

「君らあ、さっきまで徹夜マージャンしてそのままグラウンドへ来たんがすぐわかるぞお。ウシらをなめとるんかあ？ 背番号四六番っ！ なんじゃあっ！ そのへっぴり腰は！ 性根（しょうね）いれてやらんと怪我するぞおっ、しまっていこうでえっ！」

土井さんは高校野球やプロ野球、そして野球理論にも驚くほど精通していて、自軍だけでなく、我々ユートピアのメンバーにも野球の心得を独特の口調で指導していました。試合の終わったグラウンドで、土をいとおしむように黙々とトンボ（注・グラウンドの土をならすT字型の道具）を押す土井さんの姿を憶えています。



伝統ある丸善の社員として洋書を抱えて大学の研究者たちのもとへ日参して、彼らに求められるまま書籍を売り歩く単調な日々を快（こころよ）しとせず、土井さんは新しい大学の設立や研究施設開設の情報をどこからかいち早く入手して、大量の書籍はもちろんのこと、図書館の施設から備品まで丸ごと受注するという戦略的な営業に長（た）けていることを、丸善チームの一員から聞き出しました。

それに加えて、上司の指示には従わない、会社の経費は強引に事後承諾。二言目には、

「バカ上司の言うことなんか、聞けるかつ」  
が口癖とも。

紳士的で温和な人柄の多い当時の丸善社員のなかにあつて、土井さんの破天荒な言動はひときわ目立つ存在に私達には映りました。

私が土井さんを知つて間もなく、丸善書籍販売部門のトップセールスマンであつた彼は、今で言う「起業」を志して丸善を辞職しました。

彼の高校時代からの親友の熱心な勧めで、当時のソ連や東欧諸国の農水産加工品を輸入販売する商事会社を設立。二九歳。

大阪での華やかな万博開催に続く、田中角栄首相の「日本列島改造計画」が発表され、日本経済はまだ二桁に近い成長の途上にありました。

三十歳前にして抜きん出た行動力と戦略を持つ人ですから、彼は組織のルールや保守的な社風に縛られるサラリーマン生活に嫌気（いやげ）がさしたのかもしれません。そして彼は会社という組織の本質や宿命、サラリーマンとしての自らの人生を、彼独特の視点で見通してしまったのだと思います。

「このまま係長になり、課長になって、あるいは本社への栄転も。しかしそれが一体何なんや？自分には湧きあがるマグマのように抑えがたい、人生を賭けた仕事への夢や理想がある。欲望もある。こんなこと、いつまでもしとつちやいけん」  
「  
そう思つたに違いありません。」

丸善を退職した土井さんは、当然のことのようにユートピア野球部監督に迎え入れられ、キャプテン格の私をはじめ、さまざまな属性をもつメンバーに混じつてさらに交友を深めることになりました。

父親の遺した電気バリカン工場の再興に試行錯誤を続けるその頃の私と、大手企業のサラリーマン生活から飛び出して、徒手空拳（としゅくうけん）ともいえる状態で事業経営の道に飛び込んだ土井さん。

私は野球以外の場でも、共通する苦悩をもち合う者同士の絆（きずな）のようなものを感じていました。

兄のような存在として、処世の師として、つかず離れず三十年余にわたる土井さんとの交流から、様々な影響や示唆を受けたことが山のようにあります。

それは私の精神形成にも大きな影響を与えました。土井さんが知らぬあいだに、私がこっそり盗みとつたのかもしれませんね。

物事を論理立てて的確に判断する土井さんの秀逸な能力と、「正論」と現実に起こる事件の対応はあくまで別個のものとする、柔軟で現実的なものの考え方。そして局面に応じて実にタイムリーに繰り出される豊富なボキヤブラリー（語彙）と歯切れのいい実行力は、見ていて清清（すがすが）しささえ感じたものです。

土井さんは後年、いまの事業が安定した頃、冗談を交えながらに私にこう語ったことがあります。

「本を抱えて大学の教授のもとへ通ううちにやがて先生とも親しゅうなる。本屋を十年もやったりや、彼らが学者として求めているものが段々に解るようになってくるんじゃない。彼らは知識の森をさ迷うのが生きがいの、いわばまあ、学問の職人よお。会社勤めの若い頃、わしは彼らからまず、『研究者』というもんが世のなかに存在すること、そして『教養』ということの本来の意味と、その大切さを直感的に学んだような気がする。ああ、今のわしにはそれが足りない、とつくづく思ったもんよ。もっとも、今やつとる商売にやあほとんど役にたたんけどのお」

ユートピア（理想郷）のような夢を語りながら、経営の経験も手法も資源も極めて貧弱な二人の起業家は、薄暮のなかに懸命に光明を探していたような気がします。

土井さんが丸善を退職して起業した輸入商社は順風満帆、というわけにはいかなかったようです。

数年後、その商社が結局破綻したのち、土井さんはしばらく模索と転変の歳月を送りました。彼にとつて不遇の時代だったのかもしれないが、いつ会つても彼の口から愚痴めいた言葉を聞いたことは、ただの一度もありませんでした。

私と別れる時は野球の時と同じように、魚市場の若衆のような威勢の良さで、

「しまつていこうでえっ」

と、扉を開けながらドスのきいた声で活（かつ）をいれるのが常でした。それは自分に対する掛け声でもあったのでしよう。

「何人（なんびと）といえども弱音を吐く姿は見せられない」。

南方の戦場で生死の淵をさまよった海軍軍人を父親に持つ、戦中生まれ

の土井さんの矜持(きょうじ)であり、彼の美学だったに違いありません。明快に物事の本質をつかむ能力、そして人間に対する彼独自の視点と野生動物のような勘。それは借り物の理屈を寄せ集めた評論ではなく、オリジナリティに富んだ説得力をもつものでした。これは彼の天与の資質に加えて、会社組織から離れて一匹狼となって以来、一人きりの彷徨(ほうこう)のなかで、右か左か、行くか退くか、の苦渋の決断を迫られ続けた彼の体験に由来するものに他なりません。

\*

真夏に汗をしたたらせて野球に興じた世代から、まるで林のなかを見えない疾風が吹き抜けるように、三十年という時間が私たちを通り越してきました。もはやバットを振る体力も時間もなく、ユートピア野球部は部員それぞれの青春と重なり合う、朽ちかけたノスタルジアになるうとしています。

土井さんはいま、創業二七年、無騒音の杭打ち工法をはじめ多様な土木技術をもつ広島有数の土木会社のオーナー経営者として、今も現場を飛び回っています。現在の仕事も彷徨の末の、人との出会いが開業のきっかけになりました。

「わしゃあ土木の技術や難しい専門知識はなーんもわからん。こむずかしいことは若いもんに任せて、ただブラブラしとるのがわしの仕事よお。周囲の人に可愛がってもらって、どこからか自然に仕事は入ってくる。ありがたいことじゃ」

そう謙遜する土井さんですが、建前の表社会にも、本音の裏の世界にも鋭い眼光で目配りを続ける土井さんの姿を、私には容易に想像することが出来ます。

土建業には付き物といわれる闇世界の人達とのイザコザも含めて、彼がくぐってきた命がけの修羅場の数。それに長年馴染(なじ)んだ書物から得た、知識と洞察が加わります。これらが混然となって、彼独特の「人間観・歴史観」は円熟の領域に入りつつあるように見えます。

「お互い業界も違うし、商売の話も駆け引きもなしに、遠慮なくこうしてあなたと二人、トインビーがこう言うとか、マキャヴェッリのカエサルへの評価がどうの、司馬遼太郎のどこが面白い　なんて話すこんな時間、平素はないもんねえ。」

だいいち、土建屋の仲間じゃ、こんな話しが出来る相手がおらん。あな

たには体に気をつけてもろうて、ずっと元気でおってもらわんといけん。ジムにでも通うたらどうや？その煙草、もうやめなさいよお」

毎年十二月八日の二人の特別な昼食の時、土井さんは決まったように私にこう語りかけます。

あるとき土建業の現状や将来を私が何気なく尋ねたことがあります。

土井さんは待つてましたとばかりに、にわかにな真剣な口調に変わって答えました。

「この業界には大昔から続いたいわゆる『名義人』という制度があつて、大手ゼネコン（土木建設会社）を頂点に各種の工事内容に応じて、仲間の会社のなかから担当工事会社を決めて工事にかかるわけです。根元の発注会社があり、下請け、孫請け、ひ孫請け、と上から下へ、会社規模や技術に応じた階層構造になっています。それが昨今の公共事業の激減に加えて、従来は仕事配分の調整機能になっていた公共工事の談合行為などは、『公益に反する違法行為』とされる時代になりました。中小零細企業でも大きな工事の競争入札に加わることが出来るようになった。しかし、そのような企業には工事に当然必要な管理技術や資金、人材など、いわゆる工事遂行能力は乏しいわけです。不良工事が発生したり、工事が途中で立ち往生する可能性さえある。

たとえば、ほとんどの中小土木会社が工事の発注先から受け取る工事代金の六〇%前後は約四ヶ月の約束手形、すなわち発注元企業に対する信用貸しです。銀行のように担保や保証人をとれるわけでもない。残り四〇%が現金。

約束手形だから六〇%分の代金は四ヶ月間待たないと現金になつて手元に入らないわけです。工事を請け負った会社は、社員の給与はもちろん、日々の経費は現金で出ていきます。四ヶ月待てない場合はどうするのか。あるいは最悪の場合、発注元の会社がある日突然潰れてしまったら、工事代金として受け取った六〇%分の約束手形はただの紙切れになつてしまう。土建業界全体が現金の流動性が非常に悪いわけです。

今までは義理と人情や助け合いでやってこれましたが、これからはそうはいかない。資金源である銀行主導による合併や統合が、中小零細企業でも多発する時代になるでしょうし、確実に淘汰の時代になるでしょうね。これは大きな社会問題だし、国や自治体も今はまだ試行錯誤の状態にあると思いますねえ」

門外漢の私にも容易に理解できる明快な説明でした。

叩き上げの職人親方の多い中小の土建業のなかで、彼ほど冷静に業界の現状や行く末を見つめている経営者は少ないのではないか、という気がし

ます。

彼が若き日に籍をおいた大手老舗、丸善は近年、詐欺まがいの債権投資で莫大な損失を計上し、経営革新に立ち遅れたこともあって、会社は国による「産業再生法」の適用を受けるまでにたち至りました。明治維新以来、「あらゆる分野を網羅する日本の英知の源泉」とまで言われた栄光は今や無く、かつて広島の超一等地を占めていた大書店は現在、跡形もありません。

土井さんがこの数年、夢中になって読み続けるローマ在住の作家、塩野七生さんの描く古代ローマ時代の興亡や、その紀元前から一年もの間続いた歴史への興味は今も彼の思索の糧になっています。

塩野七生さんはその本のなかでこう語っています。

「(略)後世の私たちは、ローマがこの危機を乗り越え、のちに大帝国に成長したことを知っています。(中略)勝者はけっして最初から勝者であったのではない。無数の敗北や失敗を乗り越えてきたからこそ、彼らは勝ち残れたのであり、だからこそローマの歴史は混迷する現代日本に暮らす私たちにも無数の教訓やヒントを与えてくれるのだと思うのです(中略)」

ローマ人とはつくづく「リストラ」に長けた民族であったという事実です(中略)本来の意味でのリストラクチャリング、すなわち再編成なり再構築に何度も成功したからこそ、ローマは千年にも及ぶ長い歴史を持つことが出来た。同じ地中海世界に属すギリシャが文化や政治や経済において華やかな成功を収めても、その輝きが長続きしなかったこととは対照的です(中略)

古代ローマ人の「システムとはたえず補修、改定していくものである」という思想がもつともよく表れているのが法律に対する彼らの態度でしょう。

「人間の行動原理の正し手を、

宗教に求めたユダヤ人。

哲学に求めたギリシャ人。

法律に求めたローマ人。

この一事だけでも、これら三民族の特質が浮かびあがってくるくらいである(中略)ローマ人が宗教でもなく、哲学でもなく、法によってみずからの行動を律しようとしたのは、ローマ人独特のメンタリティ(注・精神構造)、「敗者をも同化する」という特質と大いに関係があります。(中略)」

唯一絶対の神をあがめるユダヤ人にとつての「仲間」とは、同じ信仰を持つ人だけに限られる。また、ギリシャ人の説く哲学はたしかに素晴らしいものではあっても、その抽象的思考を理解し問題意識を共有できる人は人類全体からすればあくまで少数派で

す(中略)

これに対して、法は違います。同じ信仰を持っていなくても、同じ知的レベルになくても、法というルールを守って生活している限りは一緒に暮らしていける」

「ローマから日本が見える」より

土井さん、私は思うのです。

お互い二十代から今日まで、独立独歩、群れにも属さず、意地を通して今日までどうにか事業経営を続けてきました。我々は出自や学歴や組織内の序列、時によっては内部抗争によって人生を左右されつつ仕事を続ける、組織人達とはまったく別次元の、ひとたび判断を誤れば「板子一枚下は地獄」という実にはリスキーで、そしてスリリングな「商売人」としての日々を長きにわたって送ってきました。それは決して横文字の「マネージメント」などといわれるようなカッコいいものではありません。

この私にしても、あなたと同じように「こうしたいと思う、こうすべきと信じる」ことを懸命にやり続けただけで、他からの支配や指示に従ったことではありません。

自分が企図し、あるいは承認した「社会に対する渾身(こんしん)のプレゼンテーション」がうまくいけば顧客に歓迎され、受け容れられる。その結果の一つとして、振り向いてみれば「利益」すなわち儲けがそこに残っていたに過ぎない。もちろん、その正反対の結果もあります。

極論すれば、ひたすら自分の思いの結晶を表現したい、立てた仮説を現実のものとして証明したい、そして広めたい、だけなのかもしれない。

自他を考えてみると、目先の利益や拡大だけを目的とした目論見(もくろみ)は、逆の結果を生むことの方が多かったような気がします。

私たちは熱い思い半ばにして姿を消した、数多くの事業家達をこの目で見てきましたよね。

土井さん。

一人の自然人として、この作業を私たちはいつまで繰り返すつもりなんでしょうか。釈迦に始まる東洋独自の思想、「刹那無常(せつなむじょう)」を一哲学として語るだけでなく、たとえば古代ローマ人に倣(なら)って、構造や手法を環境に合わせて、ためらわず柔軟に改変する。そして同時に、重要なことから有効な法に則(のっと)って、あるいは私的な成文律として、次代に継承する作業を始めるべき時がすでに到来しているように思えるのです。

私たちユートピア野球部は創立後、すでに二人の仲間を、ともに事故によって四十代という若さで失いました。山村安守さん（シヨート）、山田直弘さん（ファースト）。

土井さんに捧げるこの『ともに生あるうちに』を、ユートピアの仲間から彼らへの変わらぬ友情と追慕をこめて、二人の魂へも贈ることをどうぞお許しください。

もうひとつ。この「おじさんの青春日記 その十二」は、これまでのシリーズ集全十一巻とともに、国立国会図書館へ納本することを決めました。土井さんならとうにご存知と思いますが、国立国会図書館は納本制度によって、日本国内で出版されるすべての出版物を収集、保存する法定納本図書館です。現在までの総蔵書数はおよそ一千二百万冊。その根拠法である国立国会図書館法の前文には、設立の理念が高らかにこう謳（うた）われています。

「国立国会図書館は、真理がわれらを自由にすると確信に立って、（中略）ここに設立する」と。

土井さん。

私たちの時代に生きた、庶民のささやかな記録が国法によって半永久に保存され、ひよつとしたら何世紀もの後、物好きな学者が誰かがそのデータベースのなかから、私たちや仲間達の名前を見出すことがあるかもしれませんよ。なんと痛快なことだとは思いませんか。

今年の十二月八日。ふたたび元気で、特別な昼食を共に出来ることを一年の楽しみにしています。

リメンバー、パールハーバー！

第一部 第二部 **参照文献・資料**

「大地の子」上・中・下巻（山崎豊子著・文藝春秋刊）

「昭和天皇独白録」（寺崎英成・マリコミラーテラサキ編著・  
文春文庫）

「ローマから日本が見える」（塩野七生著・集英社インター  
ナショナル）

「人びとのかたち」（塩野七生著・新潮文庫）

ほか

おじさんの青春日記 その12

著者 里吉賢司

発行者 733 0034

広島市西区南観音町一七番一〇号

株式会社 里吉製作所

電話 (〇八二)二二二一・三三〇九(代表)

FAX (〇八二)二九一・三三四九

E-mail [ken1221@urban.ne.jp](mailto:ken1221@urban.ne.jp)

製本冊子頒価 一〇〇〇円(送料別)

発行 二〇〇八年(平成二〇年)一月一日

「おじさんの青春日記」シリーズ ホームページアドレス  
<http://www.urban.ne.jp/home/ojisans/>